

科学研究費成果報告書「日本近代史料情報機関設立の具体化に関する研究」(基盤研究(B))

(1)、平成11・12年度、代表者伊藤隆、課題番号：11490010)より

## 5 戸高 一成氏

とだか かずしげ 昭和館・図書情報部長

日時：1999年12月21日

出席者：季武嘉也 梶田明宏 勝村哲也 伊藤光一 桜井良樹 西川誠 千葉功  
土田宏茂 武田知己

**季武** きょうは昭和館の戸高さんに、史料等いろいろお話をうかがいたいと思います。それでは戸高さん、よろしくお願ひします。

**戸高** 伊藤先生からお電話をいただきまして、私自身が見てきたような史料の話をとということだったんですけれども、私自身は、皆さんのような専門の方の前で言うのはちょっとおこがましいような立場なので、お役に立てるとは思えないんですけど。ざっといままでいろいろな形で見てきた史料、それからそういったものの所在、現状などについて、わかっている範囲で簡単にご報告したいと思います。

もともと私、こういったものが専門でないの。どう専門でないかというのをちょっと説明しますけれども、私は多摩美術大学の彫刻を出ていますので、まったくこういう方向とはスタートは違うんです。ただ学校はあまり行かないで、もっぱら古本屋さんに行って、高村光雲とか明治の職人さんとか、そういう生活史料とかオーラルヒストリーに属するような史料を集めていました。そういった意味では史料に興味があったということはありません。あと古本屋さんに関しては、小学生の時から、世の中に古本屋より面白いところはないと思って暮らしていたので、神田も40年以上は古本屋を歩いているということで、経験的にはいろいろあるな、ということはありません。

ですから本来は私、大学を出た後に鶴見大学で司書の資格を取りまして、そういった専門の勉強というのはだいぶ後なんです。それは自分の本棚を整理しようと思って行っただけで、就職する気はなかったものですから、就職活動はしたことがないんです。ただ、やはり周りの環境というのはちょっと微妙……というか、海軍の方が妙に多くて、目黒の昔の海軍大学の跡に財団法人史料調査会というのがございまして、海軍軍令部の史料なんかを持っていました。そこへ大学を出てしばらくしてから延々と通って、本を見せていただいたりしました。そこには連合艦隊の参謀とか中佐、大佐クラスの方がたくさん出入りしてまして、いつもウィークデーの真っ昼間から本を読みに行っていて、その会

長の関野英夫さんに・・・この方も連合艦隊の通信参謀だったんですけれども・・・「戸高さん」と呼ばれて、「何ですか」と言ったら、「君、悪いけどうちを手伝ってくれないか」と。何が悪いのかなと思ったら、月給があまり出ないというだけだったんですけどね。それで私は、「いいですよ」ということでもう20何年、最後は理事まで務めました。そこでずっと史料の整理を手伝っていたわけなんです。

そういったわけで、私がそこを手伝い始めた頃は古い方は皆さんお元気で、お昼ご飯の頃になると昔の中佐・大佐、時々少将クラスの人がぞろぞろ出入りしていました。大井篤さんとか、そういった方もたくさん出入りしてまして、私は本当にそういう意味では門前の小僧で、一緒にご飯を食べていろいろ昔の話とかそういう史料の話を聞いていたわけなんです。そういった意味ではずいぶん勉強になったな、という記憶があります。

ですからスタートから言うと、史料調査会の史料になるんですけれども、これはご存じの方が多くと思いますが、終戦の時の軍令部の作戦部長であった富岡定俊さん・・・この方は少将だったかな。兵学校の45期ですね。この方が終戦直後に米内大臣に呼ばれて、大東亜戦争の戦史を海軍側で作るということで、戦史の史料部を海軍省のなかに作るわけですね、米内大臣は10万円渡したそうです。海軍解体前ですから。それでさっそく史料を集め始めたんですけれども、マッカーサーが来ましてすぐに、「日本側で戦史は作ってはいかん。マッカーサー戦史部のアシスタントになれ」ということで、その作業は止まるわけです。そのまま後は、第二復員省、第二復員庁とだんだん縮小されるんですけれども、最初は厚生省のなかにあったんですけれども、規模縮小で今度は外へ出て、文部省の財団法人として文化復興史料調査会というのをつくりまして、それで戦史研究をする、そして一緒に、世界の軍事情勢の研究をするということで始めた団体なわけなんです。

ただ如何せん、予算的な裏付けがあまりない団体だったので、史料的にはよく集まるんですけれども、それを十分に管理するのが難しく、言葉は悪いんですけれども、半ば死蔵状態のものかなり長くて、あるんだけどちょっと出てこないという状態がかなり長かったわけです。そういうのを端からポツポツ整理させられていたのが私ということで、私以外は当時すでに皆さん60、70でしたから、いつも孫のように扱われて、「若い、若い」と。いまでも「若い、若い」と言われるんですけど、もう50を超えましたけどね。なかなか適当な人がいないということで延々と若手をやらされて、けっこうこき使われた記憶があります。

そのなかでいちばん最初に見せられて勉強になったのは、軍令部で持っていた史料ですね。この海軍の軍令部で持っていた史料は、終戦直後に富岡さんがだいたい手の届く範囲で持って疎開したというか、持ち出して保管したわけですね。そのなかでいちばん有名なのが例の『大海令』という、天皇陛下の海軍に対する作戦命令書の原本ですね。これは現在でも史料調査会のほうでいちおう看板という形で保管しております。それ以外にも軍令

部で持っていた史料は、たとえば軍令部条例が出来上がるに関する一件書類とか、それから艦隊の編制に関する史料といったものが原本で保存されて、これはいま昭和館に移っております。

もともと海軍大学校の建物だったんですけれども、海軍大学校の本というのは終戦直後に日比谷図書館に一時疎開してしまっていて、40年ぐらいたってから日比谷図書館で書庫がいっぱいになって場所を空けたいという問題が起きた時に、防衛庁か史料調査会に返還しようという話が出たんですけれども、組合が防衛庁が嫌いなもので、結局調査会に返そうということになりまして、私が広尾に移っていました日比谷図書館まで行って、そこから4トン車のアルミバンで天井までぎっちり詰まるぐらい運んできました。そういったものを調べて、必要なものを7割ぐらい防衛大学校のほうに移しました。それは純粋に技術関係で、残りの3割ぐらいを保存してしまっていて、これも昭和館に移しました。

それ以外に、昭和40年ちょっとに渡辺勝さんという海軍図書のコレクターが亡くなって、その蔵書を買取ったもの。それから保科善四郎さんが中心になって海軍歴史史料保存委員会というのを作りまして、これで募金をしていろいろ集めた史料なども一緒に持ち込んだということです。ただ、先ほど言いましたようになかなかうまく利用できなかったところに、ちょうど7、8年前になりますか、厚生省で戦争史料館をつくるんだということで企画が上がったんです。これからまとまったコレクションを集めても目処がないということで、当時の委員だった秦郁彦先生さんがうちのことをよく知っていましたので、私も前からよく存じていたので、調査会の史料をそこに持って行ったほうが役に立つんじゃないかという話を持っていきまして、理事会でいろいろ検討して、そのほうがよかろうということで平成6年に、厚生省に調査会の史料を九分通り移管しました。これを整理して、現在九段下の昭和館の図書室で、いちおう全部公開・・・一部はまだ整理がつかないものが未公開ですけれども・・・しているというのがアウトラインです。

その持ってきたなかには、私自身がたとえばポツポツ頼まれたもの、少し大きなコレクションとして預かってきたものでは保科善四郎さんの史料とかいったものがございます。順番にちょっと説明しますけれども、私自身がちょっと驚いたんですけれども、どなたも保科さんの史料を調べに行った方がいなかったんですね。軍務局長までされた方のところに誰も行かずに、保科さんが亡くなってだいぶたってから奥さんから、奥さんもちょっと存じていたので電話がありまして、どうも相続税の関係らしくて土地を半分売らなきゃいかんと。家を建て替えるんだと。もう古いものを全部捨てる。いるものがあれば取りに来いと。持っていかないものは全部捨てるつもりです、という電話がありまして、私はすぐにバンを乗り付けて、とにかく可能な限り積んで持って帰ったのがあります。それを仕分けして、ごく一般書などはその後処分しまして、保科さんの直接手にされた史料を整理して、段ボールでそれでも10箱近くあると思いますけれども、これはいまアウトラインの

目録がもうじき出来上がる予定で作業しております。

保科さんのものは非常に若い頃からのものがありまして、海軍の勤務録みたいなもの、それから作業の日誌的なものがありますけれども、いちばんやはり面白いというか、重要なのは、手紙類ですね。手紙類は非常にたくさんていねいに取ってありまして、山本五十六とか井上成美、加藤寛治といった方ですね。あと海軍の山下源太郎とか、かなり古いところの方がクッキーの缶にいっぱいありまして、見ていてなかなか面白い。柳本柳作のなんかも、海軍の機関科問題についての直訴状みたいなとかですね。直訴とまではいかないんですけども、そういったかなり枢機に関わるようなものも若干含んで、かなり大量の手紙が残っています。こういったものを整理して、いまアウトラインを、目録を出そうとしています。

これかなり多かったですけど、私が行った時はすでにだいぶ道路にゴミになって出ている分があって、それもだいぶ回収したんですけど、どのくらい回収できたのかなという気がちょっとしますね。しばらくして防衛研究所のほうから、原剛さんから「うちにくれないか」という電話があったんですけど、今ころ言われても（笑）。

そのへんは奥さんなんか、「そういう時には戸高に言え」と言ってくれたのは大井篤さんで、大井篤さんもその時に一緒に付き合ってくれて、いろいろ手配のお手伝いをしていただいたんですね。大井篤さんも、だいぶお年になってからですけど、いっぺん家を建て替えた時に書庫を作り替えまして。「少しいらんものがあるから取りに來い」と言われまして、その時はいわゆる公刊図書を若干いただいただけでしたけれども。大井さんの本は海上自衛隊の幹部学校のほうに行ったというお話なので、そちらのほうの史料については私は直接知りません。あの人はかなり巨大な書庫をつくっておりました。80 ぐらいになってこんな立派な書庫を新規につくるのはすごい根性だなと思ったぐらい立派な、たくさん本を持っていましたね。洋書が非常に多かったですね。

そういうことをポツポツやっていて、調査会に出入りしている方が、何かあっていなくなったら声をかけて相談というのが少しあったものですから。

牧野茂さんという技術大佐の方がおりまして、戦艦大和の設計主任をした方ですけども、この方からも一度お電話いただいて、「ちょっと頼みたいことがあるから來い」というので洗足のほうのお宅に行きましたら、いま東大で整理中ですけども、平賀讓さんの史料が段ボールで16箱ぐらいありました。「これをおまえ、何とか整理しろ」と。「先生、これちょっとと言うんですか」って文句を言ったんですけどね。2年ぐらいかかってアウトラインの目録を付けて東大史料室に収めまして、詳細目録がもうそろそろ出来上がります。3月に1回位いわゆる研究会と称して目録作りの会合をやって、チェックをやっています。内藤初穂さんが平賀讓の伝記を書きましたので、その時の関係でいろいろ他の史料もあるので加わってもらって整理をつけていまして、来年の春には詳細目録が上がります。これ

なんかも、2年ぐらい自宅に積み上げて端からアウトラインを見ましたが、非常にすごいなと思うのは、これは純粋に技術上の問題なんですけれども、軍艦とかああいうハードウェアというのは、世の中で見えるものというのは結論として出てきたものしか見えないんですよね。起案というか、コンセプトから具体化するまでのプロセスって意外と残ってないんですよ。ですから、そのプロセスのたどれる史料があるという意味で、考え方の変化がたどれる部分があるのは非常に面白かったですね。

あちらでは史料室は、中野実さんが幹事でやっていただいて、最初に中野さんも、「平賀さんの史料ということでお預かりしているけれども、こう純粋に技術的では東大で持っている役に立つかな」と言っていたんです。「どういうところが面白いの?」と率直に聞かれたんですけど、やっぱり僕としては、これはミッシングリンクの一部であって、ズタズタに切れているリンクのいくつかがこの史料で埋まるという意味で、それ自体が面白いかどうかは別の問題として、話の顛末がこう埋められる部分として非常に貴重な史料なんだと思うという説明をしたら、なるほどと言っていたことがありますけどね。

そういう絡みで、うちの理事でもあった福井静夫さんというのが海軍の史料・・・特に造船関係を集めていまして、やはりお年で体が動かなくなって、整理を頼むと言われまして、この時は段ボールで4、500 あったと思いますね、最終的には。東大の鈴木淳さんなんかもアルバイトをお願いして調査会に搬入したんですけど、これはアウトラインの目録を作っているうちに先生が亡くなりまして、本当は調査会に寄贈するという話だったんですけども、亡くなった後にご遺族が呉で海事博物館というのをつくる計画でいま進んでいまして、その準備室に譲渡したので、いま呉に行っています。ただ、アウトラインの目録は私が作りましたので、だいたいどんなものがあるかは目を通したんですけども。これも、まったく世の中にこれしかないというような史料が多くて、よくぞこんなに集めたなというような感じでした。そういう妙なことで、そういった史料についてはずいぶん付き合わされていまして。

あとは個々にご質問いただくんですけども、私の場合、話の整理がうまくないので前後しますけれども、調査会で先ほど保科さんが最初に史料委員会をつくる時に、高松宮様が切っ掛けというか……。ちょうど御殿を改築中だった頃で、これも場所がなくなるからいらんものがあるから取りに来いという話がありまして、だいぶ本とか記念品をいただてきたんです。これは一般書が多かったのも、普通の本と一緒に配架しちゃったものが多いんですけどね。そういったところからいろいろ口を利いてもらったり、海軍の人というのは高松宮様が好きでしたから、宮様が一部力を入れているということで、何かあればそこにも私の史料をとということで、くれたなんていうことはけっこうありましたね。

あと、ちょっと毛色の違うのでは、やはり海軍の人ですけども、中島親孝さんという厚生省に古くいた方で、この方も連合艦隊参謀でした。やっぱり呼ばれて行って段ボール

5、6箱預かったんですけども、この方の史料は戦時中のものよりも戦後のものでありまして、Y委員会といって海軍の再建委員会ですね。それ関係の史料がごく最初からずっときれいに揃えてあって、会議録みたいなものもあってありまして、これは非常に面白い内容でしたね。まったく防衛庁も何もない時期に、すぐ目前に海軍復活を目指して、海軍の古い人間がみんな集まって動いているという動きがよく見えて、これはある程度政府レベルの暗黙のバックアップがあったんだろうなとは思いますが、そういうところはあまり具体的に見えない形で、保科さんあたりがバックでやっていたようですね。

これと先ほどの保科さんの史料はちょっとどこかでくっついていまして、防衛庁が出来た後もかなり後まで、アンオフィシャルな形で米海軍とは接触が強いんですよ。ですから整理がついても、これは出せないなというのがいくつかありまして。たとえば、政府の意見と全然違うことを直接アメリカの海軍と交渉してる議事録が残ってたりするんで、これはだめだというようなのが混じってますね。ですから、整理がついても右から左に閲覧には出せないものがけっこうあります。

あと史料的には、ちょっと特殊なもので島田謹二先生ですね。島田謹二先生は海軍が好きで、秋山真之の本とか伝記を書きましたので、そういうのを書いている時には非常によく質問とか電話をかけてきたりして聞いて、非常にまめな方ですからよくやったんですけど、先生は借りた史料をなかなか返さない人でしたから。もう、全部行きっ放しなんですよ。そのへんでちょっともめました、当人も歳だし秋山の本も出来上がったので、出来るだけ返すように最後はなりました。私のところにも電話がかかってきて、「戸高さん、申し訳ないけどじつは私は何を借りたか本当はもう覚えてない。家に来て君のところのものは全部持ってってくれ」と言われまして、大井町でしたが、お宅に行って書庫を全部見せてもらって、調査会のものは持って帰ったんですけども。ものすごい量の本で、ちょっと小振りな図書館ぐらいの、個人の蔵書としては本当に驚くような量がありましてね。そのなかから、調査会から貸したものはわかりますので、段ボールで2つぐらい持って帰った記憶があります。

そのなかで非常に面白かったというか、松村龍雄といって日本海海戦の時に「三笠」の副長だった人の回想録がありまして、これは稿本なんですよ。タイプで打ったままの本なんです。小笠原長生の同期なんですけど、当人はそれをずっと公刊するつもりで書いたんですよ。同期の小笠原が軍令部で戦史なんかをやっていたので、ちょっと見てくれということで見せたらいいんです。小笠原は全部見まして、朱墨で感想を書いて、非常に褒めてるんですよ。「素晴らしい」とか、「状況を眼前に彷彿たり」とか、延々とびっしり赤を入れて、ほとんど褒めて、「素晴らしい、素晴らしい」といって最後に極秘の判をペタンと押して公刊を禁止するんですよ。やはりかなり内容がシビアなところがあったからでしょうね。それなんかタイプですから、カーボンを入れて5部ぐらいしか作ってないと思う

んです。そういうものがありまして、それは内容的に現場の人間の証言として非常に面白いものなんですね。そういったものがかなりあったです。

そういったものを基本的にほとんど昭和館に持って来ています。ご存じかどうか別ですけども、昭和館というのは基本的には、厚生省は昭和期の国民生活の史料館にしるということだったんですけども、最初に調査会の史料を持って行ってるものですから、何度か使った方は海軍史料館だと思っている方が多いんです。その後購入した史料なんかは生活史料をどんどん入れてますので、一般的な史料館として、図書館としての使い勝手はいちおう考えてはいるんです。そういったなかに特殊なものがだいぶ混入しているので、そういう特殊なものの整理は遅れているんですけど、使っていただきたいなということを考えていますね。

このへんは、伊藤先生が編纂委員長をやった『日本海軍史』というのがございますね。あれの日露海戦史を私が書かされたので、そのへんの時には非常に役に立ちました。他にまったくない証言というので、史料を付き合わせしても非常に状況的にも固い史料だったので、よく使わせてもらったことがあります。あと全然これは違うんですけども、この研究会の前年度のパンフレットを作りましたね。あれの小池聖一さんの話の中かな、小島少将の蔵書はどこに行ったのかということがちょっと書いてあったんですけど、いわゆる公刊図書で持っていた蔵書は日独協会に寄贈しているんですね。日独協会が事務所を引っ越す時に全部処分してしましまして、残ってないです。私も日独協会関係の知り合いから電話がありまして、「場所を空けるので史料は処分する。いるものがあったら持って行っていいよ」……いつも同じなんですけどね(笑)。「残りは捨てるぞ」と言われまして行って、いくつかももらったことがありますけど。第一次大戦のドイツの公刊戦史なんかがあったのを覚えています。

結局、そういった海軍関係のものが多いんですけども、史料を見ていていちばん重要かなと思うのは、やっぱりテキストとしては同じでも、現物をいっぺん見るといのは非常に重要だなと。皆さんも当然そう思うでしょうけれども。現物で見ないとわからないことというのはかなりたくさんあるなと。それこそタイプの様子で、たとえば何部ぐらい作ったものか。印刷状況で、どういうところに配付されたものか。それから、あとは処分すればいいものか永久保存を考えているものか。テキストだけではわからない情報というのは現物にはいくらでもありますので、やはりどんなものも一度は現物を見ないと、わからんところが多いなというのが私の感じですね。

現物を見ないとわからないというのでは、活字になったものでも昔の海軍や役所で発行した本というのは基本的に奥付がないですから、1つの版で改訂版があるのかないのかというのは……。普通の出版されたものは第何版とか何刷とか日付がありますけど、たとえば海軍の内部の本というのは、何にも変えずにテキストだけ変えて増し刷りしたりしてい

場合があるわけですよ。そういうものは、現物に当たっていかないとまったくわからないという例がありまして。たとえば、私ちょっと秋山真之に興味があって、彼の書いたテキストのものは出来るだけ集めているんですけど、たとえば基本戦術ですね。最初のが明治33年頃かな。海大で作って、戦術教科書にしているんですけども、活字版のやつが、奥付的には一種類しかないんですけど、中身が3種類ぐらいあるんですよ。それは年度を追って秋山がどんどん改定しているんだと思うんですよ。私はそれに関しては古本屋に何回出ても買うんですけど、古本屋で買った2冊と調査会にあるものを並べて端から見ると、何となく版面が違うというか、様子が違うので端から付き合わせをしていくと、言葉が抜けていたり入れたり、そういう手が加わっているけど何年発行みたいところは全然いじってないという、まったく同じ奥付で違うテキストがある。他にもそういうケースがあるみたいなので、これもそうとうにチェックの難しい部分だけれども、やっぱり実物を集めてみるしかない部分だなというのはありましたね。

結局、秋山の基本戦術でいうと、第一次大戦の後まで改定が繰り返されていて、最初とまったく形の違うものが同じ基本戦術として何種類もあると。普通、テキストとして引用文献で使われているのはだいたい防衛庁にあるやつなので、いちばん最初のやつなんですよ。ですから、それだけで秋山の考えをずっと後まで引っ張って評価するというのは、逆にそれは出来ないなということを感じたりすることはありますね。

だいたい私の大雑把な、いろいろ見たなかのアウトラインはこんなものです。他にもそういった個人的な史料で、奥さんに頼まれたものとか、整理を頼まれたり、それからどこにやったらいいだろうという相談を受けたり。うちに持ってくるよりもどこか他によりいい史料館とか、ぴったりのところがあれば、そちらへ紹介して収めてもらうということもしていますので、見せてもらったという意味ではいろいろなものを見せてもらっているので、面白かったなど。これからもいろいろと頼まれるものがあったりすると、そういうのは自分自身勉強になるし、それが自分の得意でない分野でも、そういうのを探している人に見せて探してあげたいというのは図書館員の本能みたいなのがありますので、出来るだけ研究している方にピッタリのものがあった時には使っていただけるような環境を作っていきたいなということで、そういう意味でいまの昭和館は、ある程度図書と検索システムに関しては任されている部分があるので、比較的やりいいなというところはありますね。

ここからちょっと話が違って、昭和館の検索システムというか、史料の持ち方みたいなものをちょっと説明させてもらいます。最初に昭和館をつくる時、厚生省さんというのは要するに図書館をつくったことがないわけですよ。文部省さんがつくればいろいろノウハウはあるでしょうけど、役所というのはあまりそういうのを聞きに行かないんですね。文部省に行けば専門家はいくらでもいると思うのに、そういうのをあまりやってる様子がなくて。ただ、やはり新しくつくるからにはユニークなものをつくりたいという気持ちは



非常に強かったものですから、せっかくだから普通にあるものをつくらなくて、どこかセンター的なのとか、ユニークなものをつくってくれという話がありましたので、そういった意味で検索システムには力を入れて、普通の図書館にはなかなかないぞというのをやろうということでやりました。

いちばん基本的には、いまどこでも普通に書名とか著者名で検索端末があって引けるのはあるんですけど、うちの場合は目次を全部テキストで入れまして、本ごとに目次が全部データのなかでくっついていてるんです。ですから、目次のなかの言葉で検索できるというのを非常に特色にしているわけです。日本の本……外国の本もそうですけど、タイトルって非常にイメージ優先で、内容を現していないんですよね。昔の外国の本なんていうのは内容をベラベラと、こんなにクドク書くかというぐらい内容を細かく書いたタイトルの本が多いんですけど、非常にイメージが強いので、実際に本のタイトルと中身がマッチしない。ところが目次は絶対にマッチするわけですよ、内容を書いていますからね。ですから、たとえば知りたい言葉を入れて検索すると、目次のなかにその自分が入れた言葉があれば、その言葉を持った目次の本を全部一覧表示するわけですね。これは極めて便利で、特に雑誌の目次なんかはそれでなめるとも思いもかけない記事を、見落としていたものを拾うことが出来るわけですね。ただ、当然これもうちに収蔵している本だけなので、なかなか十分とは言えなんですけども。

そういったシステムおよび、うちの端末の場合、映像、音響を同時に引けるということで、写真とかムービーとか音楽も同時に同じ端末で全部引けるという、面白い端末にはなっています。あと、昭和期ということに特に限らないんですけど、時代の雰囲気というのをいちばん色濃く出しているのはやっぱり雑誌とかで、そういったものは否応なく1週間、1ヵ月で出ちゃいますからね。だいたい単行本で後で書いたものは話が整理されすぎて、こんなきっちりした話だったのかなということがあるんですけど、その当時の雑誌でその場に出たものというのは、混乱は混乱のままに見えていますので。雑誌の史料性というのは、誤報や何かもそうとうに混入するにしても、それはわかった上で見れば重要な史料だと思えるので、雑誌の収集にはかなり力を入れてまして。そのへんはよそにあまりないことであるなど。

そのベースとして、バックボーン的に評論誌として『中央公論』、読み物として『文藝春秋』を創刊号から昭和末年まで、全巻残らず画像でデータライズして、目次にある言葉で全部検索して記事が引けるというのを作りました。これはノイローゼになるほど大変だったですけど、すごいです。ちょっとデータが重すぎて少しのろいところがあるんですけど、いまソフトを加工して加速してはいますが。たとえば「三島由紀夫」と入れて引きますと、三島由紀夫の書いた記事というのが抜け落ちなく全部一覧されて、何年何月何というタイトルの記事が出たというのが一覧されまして、見たいタイトルを触るとそのページ

の1ページ目がバンと画面に出るということです。100万ページぐらい画像を入れたんじゃないかな。そういう作業をしていますね。『中央公論』なんか創刊が明治20何年ですからね。これはそうとう疲れましたが、出来上がってみるとなかなかこれはすごいと、自分で思いますね。

それから数字的な、ベーシックな世の中のデータということで、『時事年鑑』ですね。『時事年鑑』は大正の末から、ついこの間廃刊されましたけれども、創刊から廃刊まで全ページ入れてありますので、ずっと時代を通したデータとして、拾えるものがあるかなということを考えています。それから防衛庁の『戦史叢書』も102巻ありまして、あれ使ったことのある人はわかると思いますけど、甚だ使いにくい本なんですよね。インデックスはないし大混乱しているし。これを全文テキストで入れ直しまして、フル検索できるわけです。あれ、全巻で文字数が6500万字ぐらいあるのかな。これを全部入れてやったんですけど、さすがに作字が多くてメーカーはそうとう泣いてましたけどね。作字した文字が1000字以上・・・もっと作ったのかな、もちろん同じ字を何度も使いますが。中国地名とか、そういうのは残らず作らなきゃいけなくなって。最初、ゲタで何とかしてくれというので、サンプルを見せられたら黒丸だらけなんで、「これはだめだ。全部作字してくれ」というので作らせたんですけどね。ただ、あれのお蔭で、研究者がみんなインデックスがなくて泣いていたのが使いよくなったかなと。末国正雄先生が非常に喜んでくれて、「これはすごい、これはすごい」と言って、しばらくして亡くなってしまいましたけど、よかったかなということですね。

いちおう情報部の仕事のひとつとして、独自のデータベースの開発というのを残すようにしてるので、これをやったらいいかなというのがあれば、毎年考えながらやってはいるんですけども。こういうものは、オープン前は設立予算というのがかなり十分あるんですけど、後は『中央公論』・『文藝春秋』とか『戦史叢書』のようなスケールのものでやるのはもう難しいので、ちょっとスケールはダウンして、あるいは大きかったら年度で分けて4年とか5年にするとかして、有効なものは作っていきたいというふうに考えてやっています。将来的には、法律が変わればオンラインして外部から見られるということも可能だとは思いますが、現状ではいわゆる著作権というか、図書館法の枠のなかで、館内利用に限るという一札でデータの提供を受けているものが多いもので、なかなか外から見られないというのがちょっとネックなんですけれども。ただ、少なくとも自前で作った図書目録ぐらいは外から見れるようにしたいというので、ホームページに図書目録の検索ページを来年度は作る予定で考えています。

**季武** ありがとうございます。これから質問させていただきますけど、ちょっと初めに、私こういう軍事史はまったく知らないのですが、もしよろしければお聞かせいただきたいのですが、たとえば野村實さん、この前日露戦争の本を出されて、いろいろ新しい史料

も使っておられましたけれども、軍令部の史料は昭和館に来てるようですが、海軍全体ではいまだんな状況になっているのか、その概略を。

**戸高** いまほとんどが防衛庁の防衛研究所にありまして、あれの基本は終戦直後に海軍省の史料を米軍が押収して持って行った、いわゆる返還史料が中心の筈です。それ以外に、軍令部やなんかの一部のものが昭和館に来てまして、それから東大の駒場にも海軍の経理学校関係の史料があったり、それから防衛庁の第一術科学校というか、江田島にも若干残っていて、かなりそういった意味で分散している傾向はありますね。ただいちばん大きいのは防衛庁の防衛研究所。それから部分的ですけども昭和館に若干ある。野村先生なんかの使った日露戦争関係のは、ほとんど防衛庁にあるものですね。

ただあそこも、一件書類を束ねてありますけれども、いったい何が書いてあるか結局端から見なきゃいけないというような現状があるので、頑張って見た人は誰でも何らかの未発表の史料を見つけられるという状況が延々と続いているというところですかね。海軍の人ってみんなめで、一件書類をきちんとわりあいファイルして残しておく習慣があるみたいで、丁寧に史料は残されてますね。

海軍の返還史料は先ほど言いましたように富岡少将ですか、終戦直後にそれをやろうとしたんですけども、史料を集め切らないうちにマッカーサーが来まして止まってしまったんです。自分たちでまずその中間で集めようと努力していた頃、ほとんど終戦の時に焼かれたんですけど、海軍省の葦崎分室って甲府のほうに疎開書庫があったんですよ。そこにあるものを持ってくればいだろうというので準備していたんですけど、当時車の手配がつかなくて困ってましたら、調査会の隣の国立予防衛生研究所が海軍大学の本校舎だったんですけど、いまはさら地ですけどね。そこにマッカーサー戦史部が一時入ってまして、その話を聞いて米軍のトラックを貸してあげようという話が来たので、軍令部員だった土肥一夫さんという方が一緒に行って、トラックに積んで目黒に運ぼうとしたら、途中で米軍のトラックがどんどん方向を変えて横浜か横須賀に走り込んで、そのままアメリカへ持ってかれたとって死ぬまで文句を言っていました。それが後で返還されたんですから、それはそれでいいんですけどね。

**季武** あと、軍令部の史料ですけども、大部分は昭和館のほうに？

**戸高** いや、ごく一部です。おそらく絶対量は大変な量があったと思うんですけども、やはり海軍省でもそうとう焼いていますので、極端にいうと焼け残りの分が残っていたということで。いま大きいので少し残っているのが、ロンドン条約とかジュネーブ条約の軍縮関係の軍令部での控えというようなもの。それから対中国関係の史料ですね。中国の情報関係史料なんかのファイルとかいったものがかなり残ってます。そのなかに、軍令部の部員だった高松宮が終戦の時に自分で持っていたファイルというのも一冊残ってます。これ、極めて面白いです。終戦を挟んで前後の史料がファイルされていますので。ですから

おそらく残っているものというのは、あったであろう量の1割とか2割とかじゃないですか。

**梶田** 防衛大の田中宏巳先生ですか、盛んに『征露海戦史』『征清海戦史』をお探して。

**戸高** うちに1冊ありますね。『黄海海戦』の第10巻というやつがありまして、日清戦争に関しては極秘というか、彼の調査ではそういったバージョンがあって、実際きちんと揃ったものがないみたいですね。彼もその『征清海戦史』が書類上はあるはずだけれども、どこにも見たこともないと。だいたい探してうちへ来まして、1冊その現物を見つけまして。山本権兵衛が海軍大学に寄贈したやつか何かがありまして、それは非常に喜んで、「あった、あった、本物がチェックできた」と喜んでいたことがありますね。

ですから、古い海大の本は見ていると、内容も面白いんですけども、たとえば署名して寄贈したりしていると、財部のサインあり、山本のサインあり、それから斎藤実なんかのサイン、そういったサインや印の入った本があります。東郷平八郎さんが亡くなった時に、やっぱり行き場がなくて海軍大学校に収めてるんですね、一部。ですから東郷文庫という蔵書印をつくりまして、それを収めたものがかなり残ってますね。神社が出来た後は神社がありますけれども、亡くなってしばらくは東郷神社はまだ当然ないですしね。海大にかなり保存されてました。

**千葉** 史料調査会の史料はすべて昭和館のほうに行ってるんですか。

**戸高** すべてというか、九分通りですね。というのは、古いところはほとんどです。史料調査会では、月に1回現代軍事情勢の研究会だけやってるんです。ですから、皆さんお歳だったんですけども新しいことに興味があって、現代軍事の研究会をやって、古いことがいちばん若い私の担当だったので。逆転現象だったものですから、古いものはいっおうみんな持ってきて、たとえば年鑑類なんかでも1960年以降は残してそれ以前は持って来たとかですね。そういうことで、古いものに関してはほとんど来てます。唯一大物で来てないのは、先ほど言った『大海令』の原本は1冊だけ、やはり調査会の存在の証のようなどころがあるので、しばらくまだ残しておくということで残してあります。

**桜井** それに関連すると思うんですけども、史料調査会と昭和館の関係というのは、これからもずっと？

**戸高** いや、特にないです。まったく委託というか、移管してしまいましたので。

**桜井** これからも新しい史料が見つかりそうだったら、たとえば調査会とかに行ったら…？

**戸高** 向こうに話があるとこちらに連絡をくれるということはありません。いままでもいくつかあって、ちょっとうち向きじゃないなというのは、たとえばよその史料館で、知るところで相談して引き取ってもらったりということはありません。これからでも、うちでぜひというのがあれば保管したり、どんなものが入ったというのはお知らせしていく

ような形はとれると思います。

**桜井** 昭和館に移った史料は、結局国有財産になったということなんですか。

**戸高** 寄託にしてあります。ですから史料調査会に所有権は残してあるんです。ただ、無期貸与ですね。要するにあげてしまうと、後でどうなるかわからんという心配があったので。寄託で、管理が出来なくなったら返すんだよという覚書を作っております。ないし、昭和館の管理が悪かったら引き揚げるよというような、いろんな形の寄託の文言を入れて作っております。形的には国有財産ではないんです。預かってるという形です。

**桜井** 昭和館自体の運営は？

**戸高** 運営は遺族会なんです。ただ、国立、民営でチョッと微妙な運営をやってますね。ですから遺族会は運営自体は何ら介入してこないですね。純粹に昭和館で独立運営しています。昭和館が注文を受けたりするのは厚生省から直接ですね。

**梶田** 史料調査会の史料とか、受け入れられたものも含めて、官報や雑誌以外の史料の公開、閲覧体制というのは、これからどういうふうにお考えなんですか。

**戸高** いま言った軍令部史料とか、保科さんやなんかからいただいた、集めた一次史料に関しては公開の仕方がちょっと難しいのと、それから相手がわかりませんので一気に業者さんに整理してもらおうというわけにいかないのと、内輪でポツポツやるのでちょっと遅れていますけれども。本の形になっているものはもうほとんど全部整理がついてますので、うちの検索端末ですぐ出ます。それはその場で現物がすぐ出ます。よほど壊れそうとか、紙質が悪いとか、貴重であるというものは部分的ですけれども、ゼロックスで副本を作って閲覧というのも若干あります。基本的には全部見せていくように考えているんですけど。先ほど言ったように、物によっては、まだしばらくは積んでおくしかないなというのがありますね。

本の形でも、うちは人間を十分にもらっていないので、作業が外注になりますので難しいですね。紀伊国屋さんとか丸善さんが図書館の整理は専門でやっていますので、最初出したんですけども、新しい本をどんどんやっていくのは慣れているんですけど、いきなり明治の頭からのを、活字本にしろドーッと何万冊も渡したら、半年ぐらいですか、朝から晩まで「この漢字は何て読むんですか」というレベルで質問が来て、非常に私はつらかったことがありますね。

**季武** 戸高さんご自身もいろいろ本をもってらっしゃるでしょ。

**戸高** 私は、今度の家はやっと書庫を作って引っ越ししましたから。割と多いです、珍しいものも少しありますけど、なかなか整理がうまくつかないですけどね。結局書庫を作ってみて、業者が「2万冊ぐらい入るんじゃないですか」って言ったんだけど、やってみたらとても入らない。それで見て昭和館にあるもの、どこかの図書館にあるもの、どうでもいいものは概ね処分しました。かなり処分したので、いまは何とか納まっています。

やはり最後に重要なのはオリジナル史料ですね。日記とかをコピーさせてもらったものとかが重要で残りますでしょう。そうするとゼロックスのファイルみたいなやつがたくさん残りますね。だんだんそういう本棚になっていきますね。

割合めずらしい本では、たとえば水野広徳が『此一戦』という日露戦争で非常に有名な本を書きましたけれども、昭和19年に英訳版が出てるんですよ。極めていい紙を使って、カラージャケットで、大変立派な本を昭和19年に発行してまして。これは、全集の著作目録には載ってるんですけど、実物というのは私は全然見たことがなかったんで、神戸のほうの古本屋の目録にあって買ったんですよ。「ディス・ワン・バトル」というタイトルでね。で、ミズノなんですよ。これって、あれかなと思って買ったらやはり水野の本だったんですけど、これは何が面白いかというと、内容は単に翻訳してあるだけなんですけど、19年の春の時点で水野が英文で前書きを書いているんですよ。これおそらく、水野が書いた最後の文章だと思うんですよ、活字になった。そのなかで、「いまの戦争は勝敗が右せんか左せんか、誠に微妙である」ということを書いていて、非常に面白いなと思ったことがありますね。これおそらく、日本の占領下とかの関係諸国に、日本のかつての強かった時代のデモンストレーション用にばら蒔くために作ったもので、国内にはほとんどないのかなという気がしたんですよ。私も見たのはその1回だけです。

それから秋山の先ほど言った基本戦術みたいなものも、海大の講習学生というのは1年間に5人ぐらいしか採らないんですよ。古い時代ですね。ですからテキストも、いいところ1回刷っても10か20、50も刷ったら余っちゃうぐらいなんですよ。そういったものですから、たいていイニシャルとか持ってた人の判がちよつとついてあると、すぐに誰が持ってた本かというのは個人確定できるぐらいの人数しかいない時代ですから、そういったものを何冊か手に入れると、先ほど言ったようにいろんなテキストの変化が追えたりというのは面白いんですけど。やっぱり売り物で出ないので、どなたか関係者が亡くなったり処分したりした時に古本屋にたまたま偶然出てくるのかなということはあるですね。

時間だけは長く見てるので。私、学生の頃は学校はあまり行きませんで、これは変な話ですけど、多摩美って上野毛にあったんですけど、私が住んでいるところから総武線で御茶の水で降りて、グルッと神田をひと周りして学校に行って、早引きして今度は水道橋からグルッと逆に神田をひと周りして御茶の水から帰ったと。1日2回、神田の古本屋を回るという生活を5、6年はやりましたね。それから、東京近辺の古本屋はまず全部見てたと思うし、そういった意味でいろんなものが見られて面白かったなということはあるですね。

それから神田の古書会館でいまでも金曜・土曜って古書市をやってますけど、あれもいまのビルになったのが30年ぐらい前なんですけど、それ以降ほとんど皆勤です。

昭和館は九段下ですから、いまでも古書展がある日の初日は仕事と言っていなくなります

(笑)。金曜日の午前中に電話しても、いないことが多い。この古書会館の市では、良く生活史料が出る事があります。海軍の内部史料もかなり出ますが、随分手に入れた事があります。ただ、こういった史料は出所がはっきりしないのが残念ですが、良く調べると、元の持ち主の名前が残ってたりします。

**西川** 昭和館のほうでは、これからも海軍関係の史料を集められるんですか。

**戸高** 基本的には、戦争に関する基本文献は集める事になっていますが、なかなか難しいんですよ。ですから、私なんかもそのへんやり繰りで……。やっぱり欲しいものはありますけど。たとえば調査会のは寄託だから、予算が出なければいいわけなんですよ。お金を出してそういうものを買うのはやはり今はなかなか難しいんで、そこらへんは寄託か寄贈かという形でいただける方向で集めています。やはり予算を支出して買物をする時には大義名分がきちんと必要ですので、難しいですね。ただオリジナルの本当にいい史料というのは、いわゆる商品としての形を持ってませんから。ペラの文書であったりね。ですから、そういった形ですと寄託とか寄贈してもらえる例は、相談すると多いですから、チャンスがあれば何とか、うちでなくてもどこかわかる場所に保存されるように手は打ちたいとは思ってますね。

うちは土日も開いてますので、いっぺん寄っていただくと非常に面白いです。ちょっと目には非常に地味な商売をやっておりますけど、先ほど言ったように検索の機械も慣れるといろんな引き方が……。キーワードで入れるものというのは、要するに入れた時のキーワードにぶつかるかどうかという問題もあるので、同じテーマでもいろんな表現でキーワードを入れながらやっていると、いろんなものが引けるということになりますのでね。慣れると実際、単純に1回引いてみて出た以外の関連史料というのも引けますから。そのへんは使い込むと使い込むだけいろいろ使えるという、妙なところがありますね。

**季武** これ、システムとしてはさうとう重たいでしょう。

**戸高** かなり大きいですね。原則的に館内LANでお客の端末を全部LANにつなげて、画像をやるデータやなんかがあるので、いちおう原則的にデータを全部デジタル化してCD媒体でチェンジャーに入れて、そこから引っ張る形にしてるんですよ。うちに置いてあるサーバーにつながっているチェンジャーが2000連装なんですよ。ですから2000枚というか、400、600、400、600というチェンジャーを置いてまして、満杯にすると2000枚入るんですけど。私がざっとこのぐらい要るかなとって最初に出した仕様書に、足りなかったら大変だと思って少し余計目にやったので、いまでもまあ700枚は入ってないぐらいかな。ちょっと多すぎたなと思ってますけど。

でもこういうものって、最初にある程度大きいシステムをもらっておくと、維持経費、それからリースですから4年目ごとにハードウェアを全取っ替えできますので、その時に縮小しないで済むので、最初は可能な限り大きめのシステムをもらっておいたわけです。

ですから、次のシステムの時にはチェンジャー媒体というか、CD媒体はやめて、スピード的な意味からも全部ハードディスクに落とそうかなと思ってるんですよ。保存媒体としてCDは使うということをする、非常に保存性は高いしオペレーションも速くなると。チェンジャーで見にいくと、システムは速いんですよ。ただ400連送でいちばん遠くのラックにあたりすると、呼んでくるのに物理時間がかかっちゃうんですよ。これはどうにもならない時間がかかるので、使用頻度の高いデータなんかは特に、どんどんハードディスクに落として、『戦史叢書』なんかも、いまは全部個々の端末のハードディスクにデータを入れて使ってる状態です。

**季武** でもハードディスクもいろいろ難点が……。

**戸高** あるんですけど、パンクしても要するにいったんはとにかくCDでバックアップを持っていけば、だめならまた入れ換えればいいということで。私は電気は非常に弱かったんですけど、これをやって自分でもパソコンはいちおう使えるぐらいに進歩したんですけど。でも本当はよくわからないですね、仕掛けはね。

**季武** さっき西川さんが言ってたんですけど、たとえばさっきのY委員会ではありませんけども、戦後のものも徐々に戸高さんのほうに入ってくるような仕組みが出来てるんですか。

**戸高** 仕組みは出来てないです。これ、みんな直接知っている人達が電話をかけてくるだけでね。本人だったり、亡くなった後に奥さんだったり。ですから、そういう仕組み自体はないので。先ほどちょっと話に出ましたけれども、私がよくお話を聞かせてもらっていた古い方が、概ねこの数年で全滅してるんですよ。保科さんみたいに100ぐらいで亡くなった方は別にして、他の方もだいたい80を超えともういつ亡くなくてもわからない状態です。この間末国さんが亡くなった時も90ちょっと行ってたのかな。

そういう方はわりと、私がうんと若いものですから気楽にこき使えるというところで、よく使っていただいたんでね。「あとはおまえのところを持っていけ」というようなことで、よくいただいたりはしたんですけど。そういうのはいわゆるシステムでもルートでも何でもなくて、個人的な知り合いというだけのつながりです。おそらくこれからそういうものがあっても、見た目は本当にゴミみたいなものが多いですから、遺族の方が一言そういうところへ声をかけてからと思ってくれればいいんですけども、そのまま処分されるものはかなりあるんじゃないかなという気はしますね。ですから、こういうところにあるんじゃないかなという時には出来るだけ伝をたどって、失礼でないような形で声をかけたということもたまにはやるんですけどね。なかなかこれは難しいんですよ、声のかけようがね。

**季武** 遺族会などは、使えないんですか。

**戸高** 使えないことはないですけどね。これもけっこう難しく、本当のゴミが山ほどあ



るものですから、それを延々と突っ込まれてもね。だから、もらう時は難しいですよ。

「こちらで判断して、場合によったら処分させていただいていいですか」というのを一言いっておかないと、いつまでもお宝のように持ってもらえるものだと思って、ご当人は大事だと思ってこっちはさすがにもういないというのがありますしね。そのへんは史料館のスペースが限りがあるのと、書庫もそんなに広いわけでないし。

昭和館はいちおう仕様上は20万冊分ぐらいの書庫ということでもらったんですけど、今度中央公論社から、『中央公論』が力を入れて戦前に集めた史料というのを自分の会社のを含めて、全部うちへ寄託されることになったんですよ。これはなかなかすごいコレクションなんです。特に雑誌なんかでね。まず、『キング』とかああいう娯楽雑誌なんかが創刊から戦争が始まる頃まで揃ってるとかですね。与謝野鉄幹時代の『明星』やなんかはかなり揃ってるとか。文芸誌なんかかなり大量にあるんですよ。そういうものが入ったり。

それから音響のほうなんですけど、この間ちょっとお話したんですけど、レコードのコレクターで自分でも持ち切れないと。3万枚ほど戦前のレコードを持ってまして、これを全部保管してくれるなら寄託するというので、受けたものもあります、いま整理中なんですけど。軍人とか政治家の演説レコードなんかはかなり多いんですよ。これ非常に面白いんでね。それから与謝野晶子とか北原白秋とかが自分の作品を読んでる朗読レコードとか。こういうのがあるんで、そういうのもいわゆる別の意味の史料として貴重なので、そういうのは出来るだけ有無を言わずいただくという方針で集めていますので、アツという間に、10年ぐらいはいいかしらと思ってたスペースがもう1年目で危ないんですよ。

**梶田** レコードなんかは、すぐにデジタル化して。

**戸高** ものはいましまつて、いっぺんいいコンディションでデジタル録音しまして、それをやはりCDに落とし直して、いまのシステムだとチェンジャーから検索端末で聞けるということになります。

**桜井** 史料評価はどこでされているんですか。

**戸高** いわゆる専門委員会というのがありまして、たとえばそういう音響レコード関係ですとその専門の郡さんという方なんですけど、これは極めて詳しいというか、レコードをパッと見ただけで「何年ごろにプレスされたものですね」と、レコード番号を見ただけで言うような人がいるんですよ。「これはいままで世の中で2枚しか所在が確認されてません」とかね(笑)。そういうような方が専門、専門でいらっやっや、写真と音響と図書とは、いちおう私らと一緒に、これはもらう価値があるかどうかと。要するに、全部もらっちゃっていいか、あるいはいいのだけ一本釣りするべきかと、そういうような相談をしますよね。

ただ、先ほど言ったようにお預かりすると当然それなりに責任を持ってやりますので、先のことを考えると、本1冊もらってもデータを入れて利用者の手に行くまでに最低3000

円ぐらいかかりますので、100円の本だろうが1万円の本だろうが3000円ずつぐらいかかるわけですよ。だから、中央公論から2万冊ぐらいいただける予定ですけども、そうすると単純計算で6000万ぐらい装備にかかっちゃうんですよ。そうすると1年ではとても出来ない。うちの予算を見ながら、3年ぐらいで出来るのかな、4年ぐらいになっちゃうかなということを悩みながらやらなきゃいけないので、何でもかんでもというわけにはいかないですからね。

うちとしては後発の史料館で、せっかくつくるものですから、よそと同じようなものはあまり……つくる気はないと言ったら語弊があるんですけど、出来るだけ存在理由のあるユニークなコレクションを充実させていきたいという気ではやっていますよね。ただ物に関しては、私はどういうわけか運がいいというか、大きいコレクションとか珍しいコレクションをいただけるというか、任してもらえる例が非常に多いものですから、自分自身としては嬉しいなという反面、大変だなというのもちよっとあるんですけど。

あとは予算を見ながら、たとえば外国調査費用という予算が毎年1.5人分ずつぐらいついていますので、いままでは毎年ワシントンへ行って日本関係の史料を持ってきていますけれども、これからはペースを落としても1年おきぐらいには行って持ってくるとか。というのは、途中で止めるとまた話を起こすのが面倒なので、出来るだけ細々になってもやってる事業は切らずにですね。先ほどいったデータベースも、予算がなくなったら小さいものをやればいいので、どこかでプツンと切ると話の復活が面倒くさいので、出来るだけその話は切らずに、毎年毎年ちゃんとそういうものは小さくてもやっていって、つないでいきたいという形ではいます。

**季武** これから戸高さんのお仕事も、雑誌だとかそういうほうが多く？

**戸高** まあ、そうなんですけどね。これは難しいですね。新刊を買うのは簡単なんですけど、やっぱり遡った史料の収集というのは難しいですね。ただ、きちんとしたコレクションがよそにあれば、それはそれでうちではもうそちらにお願いという形で逆に手を出さなければ。やっぱりよそにないものには出来るだけ手間隙をかけるということで。そういった意味で、どこに何があるかという問題は重要ですから、そのへんも睨み合わせて。散々お金をかけてやってみて近所に同じようなものがあつたらばかみたいですからね。怒られちゃうから。そのへんは何とか無駄のないようにやりたいと思っています。

あと、非常に内輪の話を言うと、そういう作業というのも年間予算はくれますけれども、うちの場合、先ほど言いましたようにいわゆる売上げというのはない部署ですから、行きっ放しなんです。お役所というのは本質的に外部の評価を非常に気にしますので、皆さん使ってよかったら、どこかで「あれはいい」と言ってくれれば、そういうのが巡り巡ってどこかへ出てくると、「突っ込んだ予算も無駄じゃないんだな」という意識を持ってもらえますので。将来的にはそういうあたりも出来るだけ宣伝しないといけないなと思ってや

ってるわけなんですけどね。

**季武** ずいぶん便利ですよ、『中央公論』とか。

**戸高** 『中央公論』と『文藝春秋』がすごいです。私がすごいと言っても始まらないんですけど、これは面白いです。

**梶田** 明治からという、反省會雑誌から？

**戸高** 反省會雑誌から全部です。1号から全部です。私がやった仕事のなかでいちばん大変だったなというのは、中央公論に行って、「1号から全部くれ。お金は一銭も出しません」という交渉をしたわけですから、これで「うん」と言わせるまでにさうとう大変だったんですよ（笑）。文藝春秋に行っても同じことですけど、「1号からデータを全部くれ。お金は一円もあげません」と。これで相手が両方「うん」と言ったのだから、少しは褒めてもらいたいなど、時々思いますね。これが、どのぐらい大変だったかを知ってる人は誰もいませんからね。とにかく、自分の会社のバックボーンですから、これを残らず提供しろというのは常識を超えた無謀な要求なわけですよ。ですから覚書もいろいろありますけど、当分は昭和館の館内だけしかそれは提供できない形ですから。

逆に、こんなものがあつたらいいんじゃないのとか、こんなものが欲しいなというアイデアをいただければ、こちらのコンセプトと合いさえすれば、どこかでまたそういうのもやっていきたいというのがありますし。やっぱり使う人が便利とか、いいなというのがあると、それが一番はいいです。

**季武** 昭和期の国民生活というのがコンセプトになるわけでしょう。

**戸高** そうです、基本的に。あとは戦争に関する基本史料というのと、昭和期の国民生活・・・正確にいうと労苦に関するものというんですけどね。労苦つまり昭和期の、特に戦争を挟んだ時期のということがメインになるんでしょうね。だからそれを理解するには、ちょっと前、ちょっと後を。要するにピークを見るには裾野がなければわからんということで、前後を押さえるという基本的な姿勢でやってるわけですね。

**季武** いまやっているこの研究会自体は、いろんなところにある史料の所在情報を集約したいということなんですけれども、先生が昭和館をつくる時にいろいろご苦勞、ご経験があつたと思いますけれども、何かアドバイスというか、ご提言があれば。

**戸高** 所在情報に関しては先ほど言ったように、やはり根源的な問題で、どこに何があるかというのを知らないことには話にならないので。図書なんかではある程度わかる部分があるんですけど、どこかが中央的に作ってくれるといいなというのは逆にありますね。単純な所在情報で、この人はこんなものを持っているというのであれば、また別個にリストを出しながら蓄積していけばいいと思うんですけど。やはり誰でもそれを横並びでチェックできるようなシステムというのは、将来欲しいなというのはありますね。

それこそどこかに共有サーバーを置いておいて、そこへみんな同じフォーマットで蓄積

しておくということが出来れば、非常にいいと思いますね。ただ、将来的に結局はネット上というか、インターネットを介した検索ネットになっていくとは思いますが、フォーマットの問題とか、それからシステムの問題というのは、そうとう事前によく考えないと。うちなんかも最初の頃は、ずいぶんメーカーに儲けられただけだなというところがありますしね。最近ではシビアですけどね。最初は本当に、振り返ってみると甘いお客だったんだろうなと思うことがありますよ。それはある程度やって、散々ひどい目に会って、少し勉強したかなというところがありますんでね。互換性の問題とか、そういうベーシックな問題から始まりますけども。フォーマットなんかも、最初に十分練っておかないと、後でこのテーマ、この項目に関して入れる場所がないということが出てきたりというのがあって、後で画面の設計を変えてまた金を取られたりということはあるわけです。いろんな形とか内容の違う史料を横並びでチェックするシステムを将来もし作るとすれば、そうとう事前に十分時間をかけてフォーマットを練っていかないと、後で動きがとれなくなるようなことがあると思うんですね。

**梶田** この前ちょっとお話した時に、『戦史叢書』はSGMLで書いてあるので、タグがちょっと加工するのにややこしいので、今度は全文テキストにしようかなという……。

**戸高** 考えているんですけど、まだそれもエンジニアというか、SEなんかと相談しないといけないんですけど。

**梶田** 実際どうなんですか。いまの『戦史叢書』は、画面の検索のやり方であれば別に全文検索でかまわないと思うんですけど、もしあれだけ大規模なテキストだと、いろいろきめ細かい検索をしようと思うとやっぱりそのほうがいいのか。エンジニアさんは、いまだこういうことを考えてるんですかね。

**戸高** まだそのへん、ちょっとこちらでも考えてるだけなんですけど。たとえば地名とか人名、SGMLでタグを立てると逆にそこだけ読むわけですよ。そうすると、たとえば入力する時に、地名と人名なんていうのは甚だ間違いが多いんですよ。間違った時の手直しがけっこう面倒だったり。それからうちの場合、インデックスとしての機能を要求するために、原本の何巻何ページというのを表示させるように仕様に入れたものですから、行数が狂うとページが全部押せ押せでずれていくものですから、そこらへんの縛りもそうとう作ったほうは苦しかったらしいんです。基本的には、入ってる人間が本の内容を十分に理解して入力しているわけではないので、とんでもない勘違いがいまだにポツポツ残るんですよ。ですからそういうことであれば、ストレートにテキストだけ入れて、何らかの複合検索で全文検索をかけたほうがいいのかなど。

たとえば漢字で書くとハノイは「河内」ですから、そうするとそれをハノイまで「カワチ」とルビがいて、地名で「かわち」を引くとハノイまで出てくるとか。『戦史叢書』なんかではそういう表記が甚だ多く混入してますのでね。そういった正確な読みを出来ない

ために間違っ、他のところへ飛び込んできたり。苗字だけのものだと、文脈上、内容をよくわかっていないと地名とほとんど判別できないものがあったり。テキストのデータ化についても、なかなかこういうものは最後は末端の入力する人間、プログラムを組む人間の個人の能力におんぶするファクターって非常に大きいものですから、いくら企画を立てても末端で入れる人間が字が読めないとアウトという、じつに情けないことが本当に頻々と起こるわけですね。そこらへんも逆に、たとえば事前の教育をするのか、あるいは一定のレベルの人間を指定してやるのかというような、作業上のところまで考えなきゃいけないというのがコンピュータのデータベースの世界だと思うんですね。設計がよくても出てきたものは全然だめというのは、極めてよく起きるわけですね。そのへんはつらいですよ、本当に。出来てきて、黒丸だらけの原稿とか見せられたりすると。だから『戦史叢書』は、ちゃんとまともに動くようになるまで丸々3年はかかっていますよね。

**梶田** あと、作字を3000ぐらいということなんですけれども、今後OSがよくなってくれば、また漢字は増えてくるかと思えますけどね。

**戸高** ですから、もうそろそろ漢字に関してはほとんど何でもありか、近々そういう状況になるんじゃないですかね。漢字についてはいまの状況からいうと、フォントの問題はあまり悩まなくても将来何でも大丈夫になりそうな感じがするんで、心配してないんですけどね。

**季武** ご専門の勝村先生がいらっしゃいますけど。

**勝村** まあ、そうですね。

**季武** この前売り出された『超漢字』というのは、いいんですか。

**勝村** まだ組み込んだやつを使ってないんですけど、いろいろネットで宣伝されているのを見たり、使った人がいろいろ書いているのを見ると、やはりインストールしたのを買わないとだめみたいですね。

**梶田** 私、じつは買って古いパソコンに入れてみましたけど、いちおう動きますけどね。だいたい普通のDOS-Vパソコンでも、いまハードディスクが多いですから、300メガあれば十分使えるのでそのへんはいいです。ただ、普通のいまのウィンドウズとデータは互換性がないですから。ユニコードまではひょっとしたら今度のウィンドウズ2000が出た時点でうまく互換性があるかもしれませんが、いわゆる今昔文字鏡の文字鏡フォントを使った部分までいくと、全然互換性がないですね。ですから、そのなかで自分がいろんな漢字をたくさん使いたくて、とりあえずパソコンで文章を打ちたいというのであれば、まあ使えと。ただ、普通に使ってもちょっと問題があるのは、横書きできれいに印刷できるんですけど、縦書きの印刷ができないんですよ。

**戸高** 縦書き問題、ありますよね。

**梶田** だから、制約はありますけれども。

**勝村** まあ、いずれ出来るでしょうね。もともと原稿用紙に縦書きで出来るようになっていう宣伝をしてましたからね。勉誠社から、25号ですか、梶田さんもお書きになった。あそこの後ろのほうにちょっと載ってますよね。紹介してますね。だから、みんなが使うようになったらこういうものがだんだん便利になってくるんで、もうちょっと待てばいまおっしゃったように、将来性はあるでしょうね。

**梶田** この前の史料編纂所の会合で、坂村さんと文字鏡の人が話して、「じゃあそうしましょう」って坂村さんがその場でおっしゃって話が決まったみたいですね。

**季武** 戸高先生ご自身がこれから取り組もうと思っている、たとえば海軍関係の史料なんていうのは、いっぱいあるんですか。

**戸高** いや、私はあまりたくさんは、あれもこれも興味があるというわけではないんで。いまいちばん集めているのは、さっき言ったように秋山の書いたものを集めてみたいなど。ちゃんとしたものがあまりないんですよ。要するに海軍の内部のものばかりですから。結局、何を知りたいかという、日本の海軍というのが最後は決戦主義と避戦主義というか、アウトレンジ指向とその決戦指向というのが交互に出てきて、太平洋戦争の時にも戦術的な勢力争いが延々とあるわけですよ。何でそれが重要かという、戦備とか軍備というのは要求があって成立するので、その時どういう戦い方を考えてどんなものを要求したかと。表に出てきているのはその結果としてのハードウェアはありますけど、何を考えてそれを要求したかという背景が、やっぱり戦術観にあるわけで、その戦術観の2本の流れ・・・秋山とか佐藤鉄太郎あたりを代表とする考え方が、たとえばどちらが強い時の軍備計画でどういう戦備が要求されるか。で、実際に出来てきたものが何であるという、そういった元にたどれる史料ですね。やっぱりそれは佐藤鉄太郎と秋山でだいたい最終的には収斂してしまうので、そこらへんの史料を整理して、それがわかると日本の海軍の軍備の流れというのが納得できる形で割り切れるんじゃないかなと思って、そのへんの史料は気をつけて集めているんですけどね。あと、ですから海戦要務令の問題とか、そういったあたり。

やっぱり、史料は現物を見なきゃという話に戻るんですけど、現物を見て何がわかるかという、組織というのは決定権はあるけど思考能力はないですから、どうこう言っても書類というのは結局起案者のものなんですよ。ですから、最初の起案文を見て起案者のところに誰の判がついてあるかというのは非常に重要なわけなんです。それでその人のキャラクターとか、その人がたとえば閥とは言いませんけど誰の先輩・後輩、誰と仲がいい、そのへんまでずっと人間関係をたどって、どういう人がどんな起案をして、それがどういう影響力をもって決裁のほうへ回っていくか。決裁権は組織が決裁するんでしょうけど、いちばん最初の起案というのは起案者そのもののキャラクターに戻っていくので、そういった観念からもうちょっと人間のキャラクターまで戻った史料というのをもう少し見たい

なという感じはしてるんですけど。これ、極めて難しいんで、非常に収集していてもきついですけど。かなり海軍の古い方の勤務録とか日記というところから、若干溜めてる段階かなというところですね。結論でなくて、その背景。先ほどの平賀さんの史料ではないですけど、やっぱり出てきたものだけをずっと辿って見ている、なぜそれが出てきたかという背景を知りたいなということで、いくら海軍史のほうでは考えているというところですね。

**季武** 僕も平賀文書は見たことあるんですけど、全然わからなくて。

**戸高** あれ、すごいですよ。

**季武** 見ても理解できないもので。あれから設計のコンセプトを引き出すというのは、どういうふうにするのかなという、ちょっと文科系の出では。

**戸高** 私なんか文科系中の文科系ですからね(笑)。算数が嫌いで美術系に行ったと言われたぐらいですから、あれなんですけど。並べて行って、いわゆるあり得るべきところへはめて行って、ここがないというのが逆に増えてきますからね。そうすると、あるはずなのにないものというのが、そういう意識で見るとこれがもしかしてあそこにはまるものかなという形では、ある程度納得できる部分はありますね。その後でまた、それが正当なものか、正しいものかというのは別個の評価なんですけどね。そういった意味で、たとえばそういう段階になったら純粋にエンジニアの人やなんかに相談しなきゃいけない部分が当然出てきますけど。

**土田** 佐藤鉄太郎の文書等というのはあるんでしょうか。

**戸高** 佐藤鉄太郎の文書はあまりないですね。やっぱり活字化されたものがほとんどで、いわゆる彼の戦術論の本というのがあるだけで。佐藤鉄太郎は意外と戦前に本を書いているんで、それをまめに集めています。あの人は熱烈な日蓮主義者なんで、最後には全財産を喜捨してしまった状態で、死んだ時には本当にえらい生活状態だったらしいです。日本の戦術家ってみんな最後はそうなるんですよ。秋山も大本教へ行ったり、フラフラするんですけど。結局、無理な要求をされるからみんなあんなっちゃうんですね。日本の技術力と予算で日本の対米国防を全うせよと言われてれば、それは神様に頼る以外は絶対に不可能ですから(笑)。ですから佐藤も秋山も最後は宗教家ですよ。あれは要求するほうが無茶だと思いますね。ですから、だいたい東郷さん自身が日本海海戦を「天佑神助により」って書いちゃったということ自体が、ものの発端になっちゃうわけですけど。海軍の人ってだいたいアメリカをよく知ってますからね。よく知ってて、それでアメリカと万一の時に勝てよと言われてたら……。ただ月給をもらってるから、「出来ません」と言えないですからね。それはもう、いろんな形でストレスがあったと思いますね。日本の海軍は精神主義になったというけど、あれは精神主義以外に、心理的に対応できないと私は思いますよ。アメリカに比べて技術的に遅れているのはもう目に見えているんですから。それから生産力とか

予算とかで圧倒的に低いのがわかっていて、人数も少なく、油がなくて、それで勝てと言われたら、それはもう神様に祈るというのが最後の道でしょうね。そのへんは極めて気の毒だと思いますね。ただ、東郷さんの持ってた艦隊というのは最新鋭のイギリスの軍艦ですから、世界じゅうどこへ持っていっても勝てるんですよ。どの艦隊が来てもまずまず勝てる能力を持ってる。

**季武** 日露戦争の時？

**戸高** はい。山本五十六が対米海戦の時に持ってた戦艦というのは、放っておけばスクラップになってもいいような古いものばかり。「大和」「武蔵」以外は全部、艦齢が20年を超過している、ポンコツ、スクラップにするような古い船しか持っていない。これでやれと言われたら、山本五十六だってそれはもう頭が痛かったと思いますよね。そこらへんのところは建前上の考えと別に、非常に大きいファクターでみんなの頭を支配していた部分があるんじゃないですかね。

**西川** 写真とか映像を扱うのは非常に難しいんですけども、ここでも皆さん、あまり写真まで考えてらっしゃらないということなんですけど、昭和館のようなああいう写真、音響の検索が出来る史料館というのは、他にあるんでしょうか。

**戸高** やろうとしているところはあるようです。それからごく小さな、パソコンの普通の市販のデータベースを加工してそういうことが出来るものも若干あるんですけども、現実には動いているところは現状ではうちぐらいじゃないですか、音まで含めて出てくるのは。

データの持ち方などがちょっと面倒くさいというか、難しいですね。ただ、うちも入れ物としてのシステムはまあまあなんですけど、写真とか音響に関しては引っ張り出すためのキーワードの設定とかで、データがはっきりしている写真なら何年何月という日付で出したりとか、タイトルがわかっているものはタイトルで出したり出来ますけど、うまく見たい人が見たいものを出すところまでは、まだうちちょっと一捻り必要だなというところはありますね。特に写真は、考証上、元のデータの不明なものが多いので、コレクション自体は1万5000枚ぐらいあるんですけど、これはデータ的に出してもよからうというのは、まだ2、3000枚しかないんじゃないですかね。ほとんどはまだチェックが必要だなという状態になってますね。アメリカあたりから持って来るのは元のデータがかなり付いているんですけど、ジッと見ると怪しいんですよ。撮影した日にちなのか、アメリカの公文書館に入った日にちなのか怪しいのがあったりですね。見た目でちょっと間違いだろうというのもありますし。そうするとじゃあ何だということになった時に、それをチェックしていくのも時間がかかるので、集めてはみたけれどもなかなかお客のほうに行ききれないものが、積み残しがいつも多いです。

ただ写真というのは重要だと思うのは、写真でなきゃ伝えられない情報っていっぱいありますからね。特に人の顔とかね。吉田茂の顔をいくら文章で説明したってだめで、それ



は写真が1枚出てくればお終いなわけですね。やっぱりそういったものというのは必要だと思いますね。やはり史料というのは、その作られた環境を理解して見ないとわからない部分がありますから、たとえばその時代の雰囲気をつかんだ上で読むのと、単独に史料だけ見るのでは、全然理解の内容が違ってくると思います。そういった意味では写真で、たとえば世の中の景色が違う、着てるものが違う、髪形が違う、着物が違う、そういったなかでの史料の理解というのがやっぱりあると思うんですよね。そういった意味でいろんな形で史料を出来るだけ提供したいんです。最後に弱気なことを言って申し訳ないんですけど、やりたいなと思ってるけど出来てないことはいっぱいあります。

**西川** 個別史料なんですけど、川村純義の史料というのはないのでしょうか。

**戸高** あれは、確か防衛庁の防衛研究所にはあるんじゃないですか。川村文書というのは、防衛庁の防衛研究所に少しまとまって残ってるんじゃないかな。確か戦前、広瀬彦太とかああいう古い人がそういうのを使って本を書いていたような気がするんですけど。『大海軍発展秘史』という本が昭和19年に出てるんですよ。それが19年であれなんですけど、明治時代の海軍について極めて面白いエピソードがいっぱい入っている本で、その本を見ていると川村文書を使っていると思いました。

**季武** どうもありがとうございました。

(終わり)